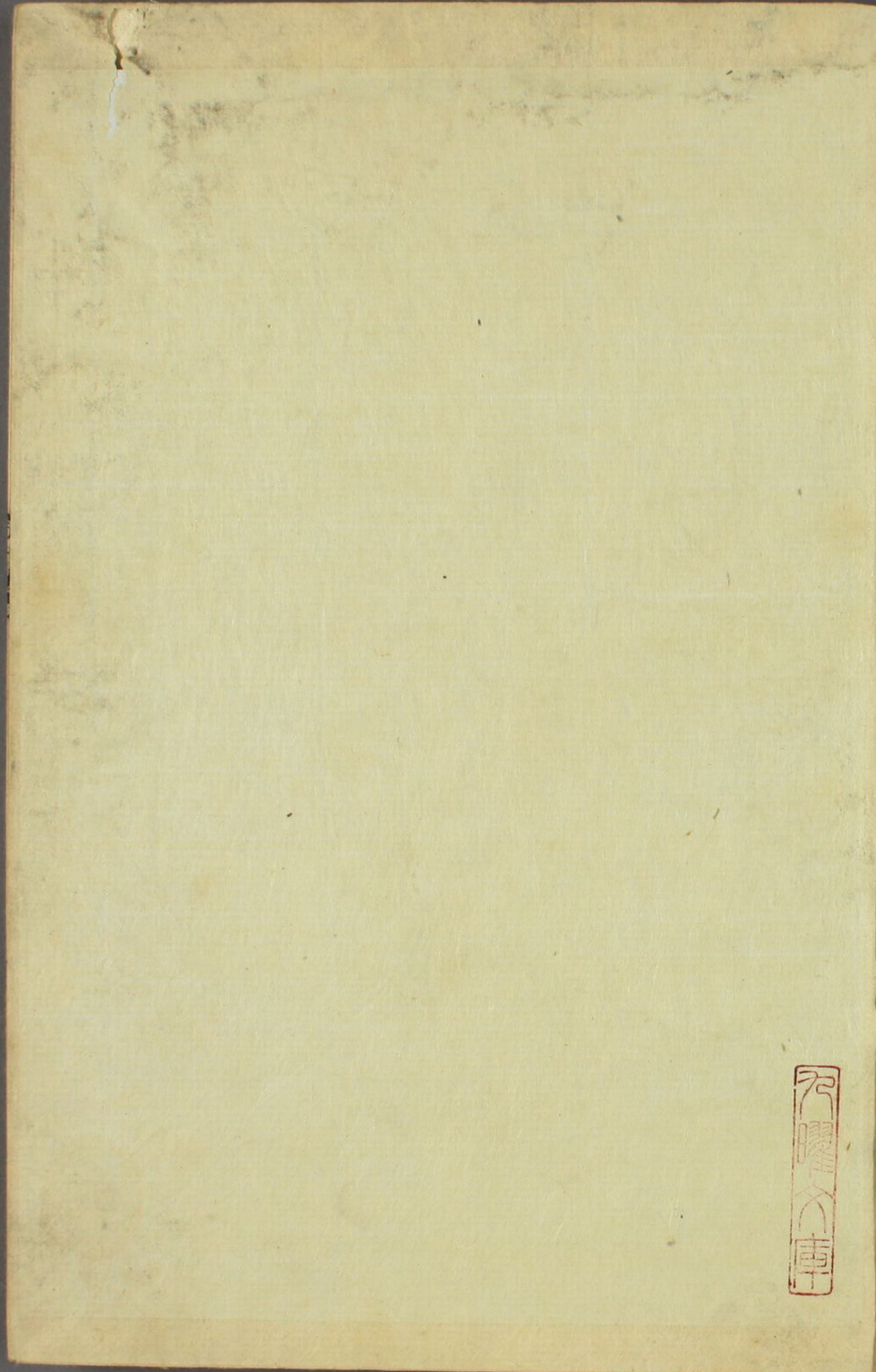




源氏辨了抄

十





天
隆
文
庫



松岡

卷名才と詞といふ字と源氏三十歳の秋の事あり
おり卷の卅歳の三月の事とすなり

とんでんいふしげはるす

源氏君の心体不とせ

里家とも妻をいふ二系統の面対は経路へり父母
よきて元礼とてけり久らるとい妻とすさるれい妻

とて寝殿の妻室の宿也

河 禮記曰聘則為妻奔則為妾 注曰 聘問也妻之言

齊也以礼見問則得與夫敵體妾之言接也言得

接見於君子不得與夫敵體也云

師云イテ
聘礼トテ以テ礼迎ル云礼ナキハ奪女ト云媒ナキヲ云和号
ニナカダキト云唐ノ書ニテハナカダテト云也齊トハ夫ト
ロトシキ位ヲ云齊等也敵當也輩也源氏ニ碁ノ敵
ト書タルモアヒテノ事也

母君の祖父中務言と云々

六十代醍醐天

皇御子前中書王兼明親王号小倉宮これより
てつりて中務卿の唐名と中書令といふ爰も
王子るら故に中書王といふ也盛衰記云兼明親王
延喜第十六御子也御兄弟中の御子の逸言に依て
城外に移され小採山の簾子庵と治比呂給ふ

神文と能書と云々の人

肉のめものつらせ給ふ

棲霞寺よひ

ずいゆら故に大覚寺の南にあたりてと下りて
より棲霞館いた大匠融公五十二代
醍醐王子の山莊也後子寺と
り棲霞寺と云今の清涼寺の東より阿鉢堂こ
れ也小野宮右府記永延治平
元年八月十八日法
橋より人位南然申請云以愛太子山号五臺山大
清涼寺建立一伽藍置白梅檀欏迦尊像
け釋迦の南然入唐して渡りてもら仏也但清涼寺と
云名は昔より有り也貞観辛未
清和七年國史より

より又李邦王記辛一代天慶朱雀之比棲靈寺釈迦堂
と云々せり奇然と云々ゆかりと云々記と云々釈迦堂
あり也所詮清涼寺といふありゆかりありゆかり
申奇奇然別一堂と云々三傳の釈迦と安置一
ちうちうや

故こ民部の大輔の君子の治りなり
兼明親王長男

伊い沙さ中ちゆう納なつ言ごん二男伊い行ぎやう後ご正せい位ゐ上じやう春しゆん宮みやう学がく士し民部
大だい輔ほといふ親王を世よ治りして後門をより何ら文
と云々伊と云々れと云々とと云々ありと云々伊と云々沙
免めんの表と云々とと云々とと云々とと云々とと云々と
と云々とと云々とと云々とと云々とと云々とと云々と

いとせよ免めんとありく免めん表めん賦ふと云々り免めん
の字免めんの字と云々とと云々とと云々とと云々とと云々と
とい賦の中ちゆうと云々とと云々とと云々とと云々とと云々と
かれと云々とと云々とと云々とと云々とと云々とと云々と
と云々とと云々とと云々とと云々とと云々とと云々と

免めん表めんと云々と隱いんが十一年に傳ふ魯邑ちゆう也と魯ろ隱いん公こう辭じ
官くわん隱いん居くせらるをと云々と死しと云々とと云々とと云々とと云々と
記きも閑居くと云々と免めん表めん地ちといふ也

伊勢物語ニアル伊行ハ公家ノ世尊寺ノ七代目也家
アルト同字ナト各別也免他故切毛免同上又音
可為業圖地名

求衣キウイ 巨留切キウリウキ 終也シユウ 莞裘クワンシユウ 上身ノ終シユウ べき地上云事也

菟裘賦トシユウ 曰余龜山之下トシユウ 聊卜幽居リョウハク 欲解官休身終シユウ

免於此速草堂之漸ミヅケニ 成為執政者シユウ 枉被陷矣マコトニ

この草堂クサドウ 氷るき地有り 一の龜山キサン 何とて氷るきといふ文章ブツ と作まりし氷出ること入り

と也

けんぞと 券ケン 約對也 賣券也 證文也

龍殿リウテン のんぞとぞとす 泉殿センテン とつふ也 大覚寺

の龍殿リウテン ももかすす面白也 詩シ 龍リウ と飛泉トビセン 瀑泉ハクセン を

どト 依ヨ られいイ して異イ とるル 此コノ の也 後拾遺ゴトクイ 十八大

覺寺ケツジ の龍殿リウテン とんてうンテウ とゆらう 赤深セカフ 赤つ

阿ア せセ 子シ 子シ 今イマ ばバ かカ ちチ 龍リウ つツ せセ のノ もモ くク ぞゾ 人ニ 入ル ぞゾ 入ル ぞゾ

西行集セイヤウ 云大覺寺ダイケツジ の龍殿リウテン の石イシ 閑院カンイン へヘ つツ されてレ 法

まマ くク 成ナリ ぬヌ とト 突ツ てテ 足タラシ 子シ 海ウミ りリ てテ 赤深セカフ がガ 今イマ ぶブ まマ かカ 海ウミ

ふフ みミ らラ んン ねネ のノ けケ してレ

今イマ だダ もモ かカ けケ けケ とト つツ けケ のノ けケ まマ までデ 昔ムカシ ぞゾ 有ア り

小倉山コクラヤマ 健ケン 當トウ 當トウ 巖イハ 色シキ 大覺寺ダイケツジ 泉セン 落ラク 枕マク 聲コエ 為長ナガシ 為長ナガシ

東北院トウキョウイン の渡殿ワタテン の遣水セナミヅ 子シ 龍リウ とト んン てテ 後ノチ 傳ツタ へヘ るル 築式部

龍リウ 龍リウ のノ 憂ウレ 子シ 洞ツツミ 有ア りリ てテ 龍リウ のノ 憂ウレ 子シ 龍リウ のノ 憂ウレ 子シ

瀧タキ 龍リウ 龍リウ のノ 憂ウレ 子シ 龍リウ のノ 憂ウレ 子シ 龍リウ のノ 憂ウレ 子シ 龍リウ のノ 憂ウレ 子シ

瀧川の瀬のりや紫式部よりもき水と瀧とよめ
つと鳴瀧比叡山の青羽滝吉野の文瀧もども瀧也
湍 急瀬也

わがことよめと 川より句詞也

老ぬきも同じくもいふは世に君いふ世もいふ

見るれそあそ

河 みるれ本のみるれそあそ見るれ本もみるれ本也

みるれ本は水子訓より本也みるれ本は水子訓本也

そは本のもあそくしてはむのまはるるすは

ありそめ命と 川より詞也

河 有りそめ命とみるれ本もみるれ本とあそくも

よふいりらん玉のら

史記曰尚有徑寸珠照車前後各十二

千字文上曰珠稱夜光 集註曰 楚王有一珠名曰

夜光昔楚臣隨侯出行見一群故牛小兒打一蛇

傷破血流在沙中宛轉命欲將終隨侯怜之救取

向水中洗以神荼封之得治適然入水而去其蛇

是海電王之子後啣七寸珠來報與隨侯於夜庭

中忽有光明謂言有賊將火入照侯乃按劍向門而

立久之不見入乃開戶看之有一蛇子啣珠在戶

外侯問曰是何地子地乃吐珠在地答曰我是海
 竜王子変作地身来草中遊戯偶逢牧羊小兒無
 知打我而傷出血命將欲死蒙先生救命傳以神
 茶封之得治故以明珠来報先生恩德侯得珠將
 進楚王々安於殿上夜中常見光明故稱夜光之
 珠也コノ故事慈仁アル人ニ神威アリテ徳ヲ報又大
 人ノ身モ千轉々シキハ災ニアラコトヲ知也

おやのいなきかげ 又ハ大臣也

孝經曰夙興夜寢亡忝爾所生 注曰 當夙興夜寢

進徳修業以無忝辱其父母

河奥

富貴不帰故郷如衣錦夜行 多漢書朱買臣が語也

天よむまろく人のあやきまろくのひよからん一吋
 こひひまろくへて今日びぐかまろぬ

三途ハニ惡道也地獄餓鬼畜生と云脩羅と加て四
 道也人夫と云へて六道とも云ふ

解脱經云ニ途と一火途と地獄也二血途と
 畜生道也三血と飲肉と食也ニ刀途と餓鬼
 道也爪刀の如き成て牙子切裂也

不審抄出云一吋と云刻のひまろく人飲めんと

天人よまぎくして咽喉の危の腋よざらと三途よ
 くら時よまぎくへ又天よのぢりよまきくきのふ
 と今都へくらよまぎくして寢と氷よあまく寝よ
 けくらべき殺赫奕クヤイメ姫ヒメハ月中の天人きりり
 催ウラよけ界よまきりて行取翁がよとまりり
 月十六夜ツキイソノヨの月よ乗ノリして氷行取ヒヤウケ家と離ワレり
 なまよまぎくく人けらべくや

細 正法念經テイポフネンキョウ曰天上欲退時ニ心生大苦惱オホクナウ地獄諸苦
 毒十六ドクイソ不及ニ一ニ又云 果報若盡モシキレバツク還墮ツク三途ニ

一時と咽喉の浦よけらちとつらうへ

むしーの人を意といひくら浦の細書

回 やのくと咽喉の浦乃細書よ鳴くれゆく船よとまよ
 表と人ねのうた熱汗の感カ情ニとよ今都へのけらよ
 の鳴くれゆくを入るまめめておせくよよ義也
 かくしあせや

鳥のくふ炭の細書鳴ぶのこひつこせぬ世中れい
 鄰トナリ入りやれよ秋とさうつうれよのりて我がらん明堂
 張騫チヤンケンが前漢ぜんかん三代武帝たいぶていのえ特トク元げん己未己未年ねんは槎しやよ乗のりて
 張漢チヤンカンの源みなもとと寃むげんとく盃さかずき津つよむて牛女うしめよ逢あて海うみり
 一とあひてふあり浮木うきの舟ふねよりほのこぐく浮うら

心と也心厄厄云の身身に彼彼岸岸子子えいこゝぬとらふとて
孟津孟津より海海らうせりり致

新古今十七雜新古今十七雜中中よむ不不知知 實方實方綱綱臣臣
一條院代
人地中務也

銀河銀河のう植植よこしらへん紅雲紅雲の橋橋らちやらちとや

植植様様查查るのら字字一一也也いりごとくむ字字也也

かつの流流といふ所所 桂院桂院とる右右秦秦の西西のりり桂桂

宮宮院院とあざうしてふらう人人一一大井大井里里と桂宮桂宮

いをくたえりて也也奥奥の桂院桂院へと作作られて大井大井

宿宿へ水水也也

とのええんあつこめ給給えん

河河 晋晋王王質質石石室室山山見見数数童子童子園園基基與與質質一一物物如如葉葉之之核核

會會之之不不飢飢局局未未終終谷谷柯柯爛爛盡盡既既歸歸無無復復時時人人
述異記

古今十八雜古今十八雜下下流流は系系よゆるる時時からひつて基基らうつ

くら人のめとよ系系よかりちうできえつとて

けふ

紀紀交交則則

板板郷郷いふ一一じも何何じも何何のえの柄柄一一あぞさうり

とのえを朽朽きえもすげんんほ世世中中よりんむもくが

山山ぐら 松松入入乃乃始始をり又又鷹鷹狩狩も先先入入雨雨といふ

人人らうもあひのわれらあわれむいさうらうらうらう

皇德皇德記記云云山山といふの始始といふ也也

何つそりげまらり

奥 睡から荒砥波に種あまき 誰よりあひうらりかひ

三條の松も 何寺詞也

河後撰 女代へんとそひとけ 姫松の根ぞそつへ 宿の志

何ぞ根よりゆやう 母もを早下詞也

漢書曰み母貴母子貴

昔物徳子親王の住居ひくら何り

尼公の父延長の帝の王子中務卿親王兼明也

兼明親王天延六十四代三年し亥八月十二日龜山み

祈氷祭あり後の世までも小念山の麓の中

そ氷の銘わらう 記ゆり 龜山に龜の尾山に

とあり

何寺まつりして 李郡王記天慶八平二代年

三月廿七日重明就棲霞寺新堂修光室藤原氏

周忌法會安置金色等身釈迦如来像一軀

同記棲霞寺釈迦堂三僧法華三味六僧供断續

七十束丹波幡魔國奉加事奏請之永代長壽三

味をゆり 家子常行三味とつらけおと

里に法一やとの始

花 軍をこいつれせよらかしのこころもみぢきりらん 元真集

ゆけいのせうまへとわうかうちりえてりり

た石の懸ついら矢と帯すりゆへは鞆かばねとりし懸つ針はりの

六位むいをりと今年五位ごねんごいよりりるをかうちりえと

海うみとりし也 鞆かばね 箭室やはずむら

やへ山山 川かわ河斗かたと用也

後撰十六 力をとくと人志れぬせとるう雲のいまうらふ あはれ

い方の草十二代天曆の比平たらの重おも重おもへの色いろうら女をのあり

松まつとじりの

古今 誰たれとらもとらふせんさ妙たふの松まつとじりのなまひん

山乃綿やまのわたいまごうう

可 粒つぶのこぞ露つゆのおきこそらうし山乃綿やまのわたのそれい

とよにけうく敵たかよとそまこはばあま

先まへいほりまにそいりまご大井おおいよあま ますとれうら精せい鋼こう

とまやうら又川のそらうらやげまど次の祠いほわり

或あるい極ごく里りうら川のわらうは桂けい流りゅうとそ源げん氏しのこあを

きほよふあちとらふ

おんがれ 巡流めぐりゅう也蓋かきの酒さけ宴えんのふるらん也 仙傳抄

月つきのすむ川のそらあら里りまれ桂けいのほのけららん 冷泉撰

河魚うい名な苑えん日月にっげつ中有ちゆう河が々々水みづ上かみ有あ桂けい樹じゆ高たか五ご百ひゃく丈ぢゆう

吳剛斫樹 酉陽雜俎曰月桂高五百丈下有

常斫之樹食傷也 隨合

姓吳名剛西河人學仙有過謫令斫樹

斫之斫之斫之斫之

古今十八難下桂子傳云時子七條の中言こんせ

強くうさ海心をうりまうりうり 伊勢

久本中よあひうろ里まれば光とのみまよひて

うらみりうりうり

淡路もて何と香よみ 月桂を伐ておろし

淡路の海乃泡とみ 月 明名巻は海氏より

泡とらん淡路の海乃泡とみ 海とく此の月

いづれの香よれうりうん

古今十六深草帝の四國忌の日よある 文屋康秀

その海をいづれあまび 照日の言ーうりうり

その駒もや我ふそれよまらうり 神樂 其駒

とり。草いりかえんや

草がよこことかめおれ又駒が我よまるといへ

いらの子がよらひもありにくらと

北君三歳といふらん 舊事本紀曰次生蛭

児コウ維ヒ己ニ三歳サト而脚ツバ尚ズ不ズ立ズ 朝チ徳ツク那ナ詠エイ蛭スズ子コ

父母フボのつれをとおすらんニ年トシよありぬ是コト行ユクむ

かゝのさしり

天アマ河カハえぬ物モノくつたまの年トシ乃ナラり

た一巻の

満言

弁ヒとめて巻マふとす源氏ゲンジ二十ニの冬フユより廿一ニの秋アキまで

つまふかりくんニせん 後撰ゴゼン十一トかり

あまのつら女メよんニかハりトよクは男ヲ乃ハ家ノまシてハかく
ひんニまシたハあまれんぞハいはりアぢウえん立ちましぬ
とクらレいはとカてハ約クらハよクえんさりたれ女メ
宿スてハ約クもハみを成成おしつしまのつらのつらの

いはつひてハきと 拾遺シツイ十トかハよク人トさしり

恒トシてハほろ人ノつらぶつらひてハ孫ノももさしり

母^ハう^ハう^ハう^ハを^ハみ^ハの^ハ内^ハ子^ハも^ハき^ハく^ハあ^ハす^ハめ^ハ也

朱^ハ雀^ハ院^ハに^ハ延^ハ喜^ハ弟^ハ十一^ハ。村^ハと^ハ天^ハ宮^ハの^ハ弟^ハ十^ハの^ハ皇子^ハにて

あ^ハま^ハま^ハせ^ハが^ハい^ハま^ハ宮^ハ御^ハ母^ハ中^ハ宮^ハ温^ハ子^ハ昭^ハ宣^ハと^ハ女^ハより

一^ハれ^ハより^ハて^ハ即^ハ位^ハあり^ハたり^ハ也^ハ西^ハ宮^ハ九^ハ大^ハ臣^ハ高^ハ明^ハ親^ハ王^ハに

弟^ハ一^ハの^ハ皇子^ハより^ハ噴^ハ方^ハあり^ハたり^ハとも^ハ更衣^ハ服^ハあり^ハり

あ^ハま^ハ人^ハ臣^ハと^ハり^ハ給^ハひ^ハり^ハ也

言^ハま^ハた^ハ此^ハ古^ハ賢^ハの^ハ山^ハと^ハ尋^ハて^ハも^ハ古^ハ今^ハ十^ハ九^ハ難^ハ辨^ハ

ゆ^ハり^ハり^ハ乃^ハ古^ハ賢^ハ乃^ハ山^ハよ^ハり^ハり^ハ也^ハと^ハれ^ハん^ハと^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハ

け^ハず^ハい^ハり^ハり^ハに^ハあり^ハ古^ハ賢^ハ山^ハより^ハり^ハ也^ハ

あ^ハり^ハん^ハが^ハ 御^ハ髪^ハと^ハ書^ハ

あ^ハま^ハが^ハつ 皇^ハ徳^ハ記^ハ云^ハ天^ハ呪^ハと^ハ乎^ハ人^ハの^ハ徳^ハ也^ハと^ハ歳^ハまで^ハか^ハり^ハん

て^ハ拍^ハ也^ハ思^ハ練^ハと^ハ信^ハより^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハ

仙^ハ源^ハ抄^ハ云^ハ汝^ハの^ハ凶^ハ事^ハと^ハ是^ハよ^ハり^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハ

河^ハ海^ハ云^ハ男^ハ女^ハよ^ハり^ハり^ハ也^ハ

ら^ハあ^ハり^ハん^ハて 引^ハき^ハ詞^ハ也^ハ

ら^ハあ^ハり^ハん^ハて^ハい^ハり^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハ

あ^ハま^ハが^ハり^ハん^ハや^ハに^ハす^ハま^ハして 催^ハ馬^ハ樂^ハ 櫻^ハ人^ハ

櫻^ハ人^ハの^ハあ^ハり^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハ

ら^ハん^ハや^ハも^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハ

ら^ハめ^ハり^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハと^ハり^ハ也^ハ

日也。橋人トハホメテ云花人ト云心也

二夜ニ女ニカリテ云歌也ハと云ハ詞ニコソ也。

毛早モこト也。毛早モ也。毛早モ也。毛早モ也。

二夜ニ女ニカリテ云歌也ハと云ハ詞ニコソ也。

毛早モとトハ明日也ハウタフ聲ニ此キコエ

何と云ふん 明日アハハまハまハと云ふ

橋人の詞ハあハも早モやと云詞ハと云ハ用ハ道

後乃ノと云りの浮ハと云ハ 并 後乃ノ籠ハ久ハる

くらハ籠ハ久ハる

世中ハ夢ハのハと云り乃ハ籠ハ橋ハの打ハと云ハと云

二十七

二世相ハと云ハ計都星也女ハの厄ハと云

かハト 河平ハ并 聖武天皇神龜二年 唐玄宗開元 三年ニアタル 柑子ハ後

唐國來殖種ハ法ハ子本草曰柑子無毒ハ云仍病者ハ宜

食

らり大ハの清ハらやハはハと云ハはハいね

涅槃經曰猛火消風ハ水登ハ煙ハと云ハと云ハ務ハ終ハふ

聖武天皇ハのハ也

吹風ハ消ハら猛火ハの也ハと云ハと云ハと云ハと云ハと云

文集曰四大ハ所成ハ猛火ハ類ハ水邊ハ焰ハ五ハ溫ハ假ハ令ハ質ハ終ハふ

如ハ風前ハ雲ハと云

くづらひ

古今十六哀傷部と野岑雄

深草の燈への揚へる今年づりいすみぢけ

宮の内事より

入道宮也中宮のこれ給ふ

崩御と一禪のあそびせり天子とあつて位あれ

みや又帝をも成ともくれ給ふと内事とつて

何うなやと思れての詞也常子安御とつて

こころのゆとりつてつて續古今十六よ一條院

の内事の後とあり續拾遺十八よ義福院内事

乃ほとあり程撰集よつて記

よる 夜居僧へ二間よ候寸二間とて法縁敷の内也

内加持のつて

いづれつてたつたつてこれよとて海のつて

寛算供奉とつて一僧と系院はつて振とつて

目とつてつてつてつてつて

世の終るぬとつてつてつてつてつて

侍とつてつてつてつてつてつて

尚書太甲下篇曰伊陟相太戊亳有祥祿穀共生

于朝云伊陟ハ伊尹ガ子也太戊ハ殷ノ七代ノ帝也

湯主ノ玄孫也亳ハ都ノ名也祥ハ妖怪也穀ハ楮ノ木

也注ニ二木合生七日大拱不恭之罰者也云野外

生スル水ノ朝ニ生ズ又根ハ一ニテ一木トナル七白ニ拱ト
 兩ノ手ヲ合セテニギル程ニ成シ也人君貌不恭天將
 罰之木恠見其徵也伊陟曰臣聞妖不勝德帝之
 政事有闕白帝修德太戊脩先王之政明養老之
 礼二年而遠方重譯而至七十六國是言妖不勝
 德也漢書五行志曰凡草木之類謂之妖自外
 來謂之祥々是惡事先是之徵故為妖怪也云
 尚書高宗肱日篇曰高宗祭成湯有飛雉升鼎耳
 而雉云六殷ノ二十代々帝ヲ武十ト云殷道ヲ中興
 セルユニ高宗ト別ス治五十九年也祭ノ後宴殷ニ
 肱ト云周ニ繹ト云祭ノ明日又祭ヲ云蔡氏ガ注ニ

成湯ハ殷湯ニアラス稱商トテ高宗ノ父ヲ祭ル時ト
 云フ也漢書曰鼎三尺三公象也而以耳行野
 鳥居鼎耳是小人將居公位敗宗廟之祀也
 嗚呼王司敬民罔非天胤典祀無豐于昵
 嗚呼ト歎息スル也王者ノ主民ヲ敬ミ天ノ嗣テ常ニ
 道トノ民ノ事也昵近也稱廟トテ父ノ廟ヲ云祭礼
 有常ワガ父トテ豊大ニスヘカラス廟神ノ恠ヲ示メ高
 宗ノ服罪改修セシコトヲ思ヘル也父ノ祭ノ大ナル改メ
 サセシ為也祭祀有常謂犧牲粢盛樽俎豆之

ハラニセタリ故ニ改^ニ嫪毐^カカ下也時ニ秦皇ノ假父ト成^リタ
ト云々テタリ故ニ車裂^ニセラレ^ルハ流シ放^レ囚^ト成^リタ
リ是モ不^レ韋ガレワザ也^不韋^モ積^ニ惡ノガレ難^シテ始皇即^シ
位十二年ニ蜀^ヘ流サレ^ル毒ヲ飲^テ死^{タル}也^河義

嫪^ハ力高^カ力報^ニ切^レ嫪也^嫪嫪也^嫪嫪於^レ政^切切^古
嫪^字秦皇^母与^ニ嫪毐^嫪嫪故^ニ世^罵嫪曰^毒毒^玉篇

始皇ハ儒者ヲ坑^ニセル數^四百六十四人トアリ言^フ
燒^{コト}三十日ノ間^ニ燒^{ツク}サヌトアリ李斯ガシワザ也

東^晋元帝名ハ敞^ト云^レハ實^父琅^琊ト云^レハ小吏^ニ
牛金ト云^者母^ニ密^通シテ生^セタリ故^ニ牛^晋上^云

鶴^林玉露^第五^日曰^呂秦^牛晋^秦虎^視山^東蚕^食六^國
國^不知^六國^滅而^秦先^滅矣^何也^始皇^乃呂^不
韋^之子^則是^嬴余^征切^秦姓^也氏^為呂^氏所^滅也^司馬^氏

西^晋也^欺人^孤寡^而奪^之位^不知^魏滅^滅幾^而晋^滅
何^也元^帝乃^牛金^之子^則司^馬氏^為牛^氏所^滅

滅^也春秋^書晋^人滅^郟郟^在陵^切今^琅琊^縣也^義正^如此^胡致^堂
堂^欲用^春秋^法於^始皇^紀便^明書^呂氏^元帝^記便^書

書^牛氏^以後^其實^云
詩^鍾鷄^之奔^々篇^曰鷄^之奔^々鷄^之疆^々
疆^々六^居有^常匹^ヲ云^コノ詩^六衛^宣公^ノ夫^人ハ宣^姜

ト云コノ腹ニ跡ツギノ惠公ヲウヌリ庶兄ニ公子頑ト云
 アリ庶兄トハ下兒腹ノ嫡子ナリ惠公ノ兄也頑ト
 宣姜ト媼行アリ惠公ノ國主ニテ兄ノ惡行ヲケツラ
 又事ヲ刺也鶉ヤ鶉ハ雌雄定リ丸匹耦アリテ也ニ
 モ斥ニモ離ヌ鳥也母ト子ト匹耦ニアラスメ鳥ニモ劣リ
 丸ト云リ又鶉ハツルムラ人ガ見ヌカ母ノ身トシテ子ニ媼
 スルハ鳥ニモ劣丸ト云也公室ノ媼行ヲ國人マ子ビ夫
 婦ノ礼乱レテ野アヒニテ他人ノ妻女ト交會スルヲ桑
 中篇ニ刺タリ如此ノコトヲ記ハ後世ノ戒メトセン為ナリ
 尤傳ニ乱臣賊子ヲ記タ後人ヲ戒ベキ為也唐太子

公ト云人尤傳ヲ習テ讀レタニ父ヲ殺シタト云所ヲ見テ
 我が切ルヨリ悲ク思テ惡事ヲセシメトシ

日のもくもく又もくもく

三代實録曰人疑先是若有密事欽或云在中將
 為嫁件所出家相攝其後為生髮到陸奥國
 業平之系所へ密通のより後執持徳をもとらりたり
 これ代業平のたのひもて皇子もろり又母と子どもの
 密通もろへははゆへに日かまは例るにとまらり
 一世の源氏又納言大臣ありては又子親王にあり
 位をもつきはへるもあまこの例あり

源氏の譜代の源氏よりあつて其代より一旦たりつと二世の

源氏といへり也

一世源氏任官以後即位の例

光仁天皇 元大納言 桓武天皇 元後五位上。大納言。中務卿

光孝天皇 元一品 宇多天皇 元觀十二年賜源氏任侍從。仁和三年

年為親王

式部卿是忠親王 光孝天皇御子。同親王。元慶八年四月十三日賜源氏。寬平三年

年十二月二十九日立

太子是貞親王 賜源氏。任中務卿。貞元二年四月為親王

中務卿兼明親王 貞元二年四月為親王。元正二年源氏

上野太守盛明親王 康保四年七月為親王。元正四年大藏卿正四位下

牛車ゆゑにして 禁中より牛車の入らざれ

寛弘元年八月大内藤原朝臣

兼牛車

前載とてしつとくひもとれり 引当詞也

百子の花のいもぐ秋の野よこひはねん人あま

あつれをとり也

古乃びつれとてしつとくひもとれり 引当詞也

のえりつとくのいもぐれ 引当詞也

むらぎれり 引当詞也

この門ひろげをせ給ひて

于公高内 蒙求曰

前漢列聖于定國字曼情東海郟人其父于公為縣獄吏

郡決曹決獄平罹文法者于公所決皆不恨郡

中為之生立祠公祠始其相内壞父老共治之

于公謂曰少高大内令容駟馬高蓋車我治獄

多隱德未嘗有所寬子孫必有興者至定國宣帝

時為丞相封西平侯子永為御史大夫封侯傳世

云云于八姓也于公ノ居里ノ内ヲ里ノ父老トモ

タテナラス時ニ大ニセヨト于公ノイハレタル也于公ノ子ハ

定國ト云孫ヲ八永ト云タリ丞相ハ大臣也御史大夫ハ

彈正尹ノ唐名ナレ此ハ大納言ニタタルト河海抄アリ

中宮花あるの御啓ハ鳳輦ハりハ糸毛車ハりハよの守

りハるハれハ駟馬高蓋ハよハるハるハ御ハ也ハ女官ハ其ハ御ハ

源氏ハのハ二氣流ハとハ以ハ里ハとハ流ハへハいハれハ子孫ハ勢ハ留ハあり

てハ二氣流ハのハ門ハといハらハげハをハ給ハひハてハ以ハ德ハとハ相ハ心ハ給

とハとハもハ所ハまハ立ハ給ハへハとハ御ハりハとハるハ也ハ德ハ神代卷五

りハろハろハはハまハの花乃綿ハまハとハくハ御ハりハとハいハ

何ハシハ晋石季倫居金谷春花滿林ハ作ハ五十里錦障ハ遇ハ春

不遊樂ハ恐是無心人白樂天晋書曰石崇字季倫

云奢テ五十里ニ錦ノ障子ヲ立タリ

やまここののえも秋のそとさうりさうりさへる

万葉第一云大津宮御宇天皇詔内大臣藤原河

内親王春山万花之艶秋山十葉之秋時額田王

以奇判之奇

万 去いこの花のひくま咲ざり物の花の秋ぞまきし

町まつけて見給まよ

大いそ秋まよとをりど花みら町まよれもの

日 喜秋まよい乱まよつ町まよつてつらるる

實枝云けはひ胡蝶巻と野分巻と申べきの序也

あやしやまー夕ま

あやしやまー夕ま

らり夕ま志しり秋の夕風

秋詞 劉禹錫

自古逢秋悲寂寞

我言秋日勝春朝

らり夕ま志しり秋の夕風

い詞肝文也人よまよとくらり義理とさし能

と志ぬい恋とすらまらぬあまきこのの也我あ

まきんいん曲歎心也

ほろろんそくまらりほひぬ

つらん人のあまつらつてまきつたれゆ

栞のらんまきせし

後拾遺一 中原致時

梅の香と梅の花を匂ませし柳がえさよとせて
花けららやもくくつれこのまきりたる
一とせ路よ けららぬ色のる也ーらや

まくつれと今世一カもれ年開し奇持致
かく不慮さらりつれと易也孔子の弟子蘧伯
玉とつらん五十歳まで前のは十九年の罪を知と
つれと罪非ともつら似たり又實枝の義をな
壺中書と母言の女御とあひくへ馬良のまゝ
あつと親のつらりも子の事い大切らとつら故ぞ
とあひとりつららの中れ初一きと義也子のる

とん冷泉とさくつらつら 宗祇の初の義と用
つら

花のつれとつらつら

女今 かつつれとつらつら 男のつらつら流して下よめ
つれとつらつら

つらつらとつらつら 世中とつらつら物とつらつら

榿

榿

文韻曰 朝華也 真韻云 木榿也

以^二并^一詞^二為^一春^の名^源氏^之十^一歳^の九^月より冬^の末^とす

か^り—^あつ^らゆ^らえ^ぬ水^とせ 師云 け^い源^氏の^と

了^まれ^ば好^きと^て敗^りし^れば^年よ^らず^是春^秋
の^文法^也

交^ま封^函—^はひ^て 男^と女^の封^函と^りみ^の帳^を
と^隔て^何と^かも^すと^りみ^也

その^世乃^つつ^みお^とる^戸の^風よ^くへ^てき
中^後日^科乃^風乃^天乃^八重^雲於^吹教^津夏^也

中後日科乃風乃天乃八重雲於吹教津夏

うん乃に衣とぬぎて 亂人のうんまかりのうんま
うんまのうんま

うんまでもうんまのうんまうんまうんまうんま

うんまうんま

四行又

うんまうんまうんまうんまうんまうんま

うんまうんまうんまうんまうんまうんま

うんまうんまうんまうんまうんまうんま

うんまうんま

うんまうんまうんまうんまうんまうんま

うんまうんまうんまうんまうんまうんま

よからぬ物のせう

河海は枕双紙よ冷

物のうんまうんまうんまうんまうんま

の枕双紙よ冷

御言り又元補がうん

うんまうんまうんまうんまうんまうんま

うんまの月とせう

うんまの月の月

うんまの月の月

えんり

うんまうんま

後拾遺

今いささひ流さんとて人づてあそびりやう通雅
らづりの 日記

あしあそび河をみん人分るよかきとて一かたり常盤屋
實校を何んびて人のしをたもうはらんとん人

いさ川 古今雲滅のそりよ

大との所乃おするるり川りてあそびよ我らの天智天皇
いふれ名取川と抄るん不識川とあり麻山よ不識
川とよい合らるり一高嶺とくもやもらるるも
同のそ

むらたゆもあしはらのそり川りてあそびて我らの

ひらつゆらうりてあそび 無のの 榎舟流の腹かうり此

先ずしらうりて一て物さび一あしあそびあそ

流氏あそびうりてあそびあそびあそびあそびあそび

ゆよ打とけ給るす貞節よて百事らるん人たごひ

あはれあそびあそびあそびあそびあそびあそび

たしあそびあそび

あしあそびあそびあそびあそびあそびあそび古今

あしあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

あしあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

評引卷十 二十六

静里より光とやら女つていふ者乃とある月とらんば
すまじいのはあゝよひ重らん 法少納言が枕双紙

師趨の月夜とつ詞ありまがまどに申り歎けしお癖

たしや 管記ありとつみあり

十列冷抽 師趨月夜 同扇 同蓼水

老女化粧 女醉 胡瓜 法師解舞

無酒神樂 勅使被打囚競馬 昆崙八益畫舞

管日記云師趨のゆら乃此月つあつきた物話

くろとく人んそあますと海とあすの月夜

もあろうあつひくれ 望十五日也十三月申白ヲ望トス

まどまらその海とあすの月夜

みどまらあげさせ給ふ

遺愛寺鐘款枕腰 香爐峯雪撥簾看 聖天

空まらろ 雪園

六十二バ村と天宮應和三年推言作蓬萊山

一とせ中宮のわらへる者の山つくれ

花山院 後涼殿の前 南壺 雪山 作られて作又

ありしゆへ小右記 寛和元年正月十日

のよし

枕双紙云師趨の十余日の程 雪み 一とせ

使つか子こ武部ぶべ聖忠せいちゆう孝かうままりりととれれ茵蔯いんじゆうせせてて地ちかかと
りり子こ宮みや山さん作さくせせ給たまふふぬぬ所ところももああままれれ此こゝ前まへのの壺つぼもも
つつららととせせ給たまへへりり申まを言ことふふもも弘こう徽き敵てきのの此こゝ前まへよりよりつつらられれ
りり糸いと極ごく敵てきももつつららととせせ給たまへへりりとといいふふ

ああままののここめめつつとと見み守まもりり山さん所ところははあありりままりりままりりとと
いい名な山さん長ちやう徳とく辛しん六ろく一いつ亥がい二に年ねんのの後ご長ちやう保ほ二に年ねんのの前まへよりより也なり
此こゝ相あひま積つみ寛かん弘こうののゆゆききれれぶぶととせせとといいふふはは又また宮みや山さん
ままりり子こ宮みや山さん作さくせせ給たまふふぬぬ所ところももああままれれ此こゝ前まへのの壺つぼもも
つつららととせせ給たまへへりり申まを言ことふふもも弘こう徽き敵てきのの此こゝ前まへよりよりつつらられれ
りり糸いと極ごく敵てきももつつららととせせ給たまへへりりとといいふふ

また又さづりののさびひありきんや 保氏一部の

らら女にょのの心こゝろよりより貞せい儀ぎ百ひゃく年ねんはは双ふた多たにに信しん長ちやう女にょ院いん
也なり是こゝろののああままりり子こ宮みや山さん作さくせせ給たまふふぬぬ所ところももああままれれ此こゝ前まへのの壺つぼもも
つつららととせせ給たまへへりり申まを言ことふふもも弘こう徽き敵てきのの此こゝ前まへよりよりつつらられれ
りり糸いと極ごく敵てきももつつららととせせ給たまへへりりとといいふふ

んんととあありり回まわりりももううはは 花散里はなさんり双ふた多たにに信しん長ちやう女にょ院いん
何なにらら人ひとはは一いつ年ねん月げつとと流ながれれもも同どう一いつ心こゝろむむけけのの乘のりりり
貞せい節せつととりりあありり回まわりりももううはは 貞せい節せつととりりあありり回まわりりももううはは
ままりり子こ宮みや山さん作さくせせ給たまふふぬぬ所ところももああままれれ此こゝ前まへのの壺つぼもも
つつららととせせ給たまへへりり申まを言ことふふもも弘こう徽き敵てきのの此こゝ前まへよりよりつつらられれ
りり糸いと極ごく敵てきももつつららととせせ給たまへへりりとといいふふ

保氏一部の

^{師云}高き女流の源氏へ夢み若くは河也密通せり
^ら業淳よりりさりと足仏流も懇感の煩悩の都り
^らさぬの彌系よりよ又一念か百生と統り
^らいとしてぞい世の濁とすい流るるん

^{師云}中文源氏と密通の一も也中文天下下の女
 のもかひらるる身はて嫁籠るる人夫送不通の極
 や好交継子なれば母と子の礼もさひきさ夫婦の
 礼をも失ひたり一生乃中よあうそれどうも不
 慮の幸や天理よさひくは後世の障とる
 り尤や

一蓮説生也

^{善道}和尙五會法事讚曰一々池中華盡滿華也
^ス愍是往生人各留半座兼華臺詩我箇浮同行人

し通女

以テ河海ニ卷名以テ五節舞娘為宗
源氏之十二卷の三月より廿四歳の十月までの
よとせり

衣更師云ク更衣也月朔日カキとカキうカキきカキ端午カキ也

きふみふの瀬より世と

死カキ川カキ淵カキもカキ河カキねカキ宿カキもカキ瀬カキよりカキゆカキゆカキゆカキ

やぐりカキ位カキのカキてカキんカキとカキわカキり

親カキ王カキ乃カキ所カキ子カキのカキ後カキやカキうカキ後カキ位カキ下カキ子カキ叙カキとカキ源
氏カキのカキ威カキえカキつカキらカキきカキにカキうカキりカキ親カキ子カキのカキ所カキ子カキをカキ推カキしカキてカキ夕カキ暮

と五位よと帝のころと也
 一世の源氏直は後五位下は叙せらる也夕方の二世
 の源氏なれば五位は叙すき人なれば夕方の世の
 間なるもあらまなりて定て五位は成るべきと世は
 乃人もさひいふ也

あまごいて殿とよりなり
 一世源氏乃子の其
 五位は五位下なれば朱の袍と着して昇進すきよ
 冠者君の淡黄と着すらゆこのころあり五位の
 縫殿寮式は每位は淡黄とんえたり故は淡黄と
 叙爵せざらむ毎位より延喜

殿上よりなりとより每位黄袍と云一説あり桐壺の
 巻に記ゆりぬ一云六位乃緑の袍と淡黄とより
 深綠色は藍と新安といて深より淡黄の色は通
 たり故也先よりして三条上の乳母の詞は六位宿
 世とつひ夕方の色は淡緑とやつひ志りるべきとわれ
 ば六位の袍も還昇せりといふべきも也
 廡庇也亦 廡覆廡 廡名目 先祖ノ位ヲツカ心也
 還昇名目 也
 殿上よりなりとより童殿上より童殿より昇殿は
 人加冠して又殿上とらと還昇はより也

大づのるよをりあつらん

花 大匠の息太学

のりと習例の閑院太大臣藤原冬嗣云子息良相

号西三條也
右大臣下也

大學序曰人生八歲則自王公以下至於庶人之
子弟皆入小學而教之以灑掃應對進退之節禮
樂射御書數之文及其十有五年則自天子之元
子衆子以至公卿大夫元士之適子与凡民之俊
秀皆入大學而教之以窮理正心修己治人之道
云々又考今十二也や小學のりと粗あつて大
學よ入流よへ

禮記曰玉不琢不成器人不學不知道是故古王
者建國君民教學為先

何ぞあつらん

花 儒者の入學の時文章院の堂監

か書下也名簿子字と書也聖廟の以字の管云云
法行か字の三禮文屋康秀か字の文楸といふ考の
字も源あつて何らん

氏と冠とす

玉堂 詳也 蘇軾也東坡 樂天也白居易 白
夢得 字也 劉禹錫 諱也 劉退之 字 韓愈 諱也 韓
子厚 字也 柳宗元 諱也 柳又僧三毛

虚堂 字也 智愚 諱也 智氏上常ニハ愚虚堂ト云 仙閑

如野の天祿乃諱の道真ト云 眞筆今にあり

びりたりありやまん

因依鳴高 又号大家

びりたりありや鳴るるや大言らくて鳴る

表のきりきり

あまの海もんとみそりあせ

同俗の信の詞つり人

けうけう題の文字えりて文章博士も

とらふや

翰林の人乃出題すは諫の字の切韻とて何字

ゆえ諫とすといふ時もあり又叙諫とて題のみ文字

の中よ平聲の字とて諫とすりふもあり又

何諫とて作者のらまうせよらりもあり

窓のりらとびつび枝の音と訓

蒙求曰孫康映雪 車道聚螢

孫氏世録曰康家貧無油常映雪讀書少小清介

文遊不雜後至御史大夫

晋車胤字武子南平人恭勤不倦博覽多通家貧

不常得油夏月則練囊盛數十螢火以照書以夜

繼曰季桓過在荆州辟為後事以辨識義理深重
之稍遷征西長吏遂顯於朝廷時武子與吳隱之
以寒素博學知名于世又善於賞會當時每有盛
坐而武子不在皆云無車公不樂終吏部尚書

まうわく

花シラニ 今曰凡學生在學各以長幼為序初

入学皆行束脩之礼於其師各布一端

延喜式曰凡遊學之徒情願入學不限年多少惣

加論試其有通一經聽預學生但諸王及諸五位

以上子孫不煩簡試

論語述而篇子曰自行束脩以上者未嘗無誨焉

註脩ホ也十ホ為束ホ古者相見必執贄以為禮束

脩其至薄者聖人之於人無不欲其入於善ホ但ホ不

知來學則無往教之禮ホ以上古人々相應ノ物ヲ

モツテ行也

史記 司馬遷セシが作ル 本紀十二卷十二月 表十卷

世家三十卷一ヶ月 書八卷 列傳七十卷

都台百卅卷為八懺

史記 寮試 一禪云燈燭料と後り初り

大學寮ウチノミヤにて九年ウチノミヤ學文の功とつてほゞ大學寮に
て史記と試られウチノミヤ雜載ウチノミヤと同ウチノミヤ五條の中三條ウチノミヤ通

ずらと及弟と寸則文章得業生補とい官二人
 あり又又豫樟七年と橋七年と経きの因に
 へりたて七年の万学文と後に方畧の宣を
 命を下され式部省にて課試とらん先詩賦を
 作ら次に豫文と書れ儒業の一大事也問者は
 の儒士と出てて其のゆを對句とすて不審し
 とらちに獻策の人一とに對句とすて證文と引
 て其也を問題とする本朝文粹第三卷に出
 せられし神仙神祠鳥獸言諸運命山水松竹や此
 題に對てその故事と不審する事也題の時に適

て多くかつふけ試成補一と文章生補
 と又文章生補ては又に方略の宣旨と對て
 課試とらんあり同者生云文章博士下同也
 諸國より才人と年貢と貢士も進士も
 一は才人と大學寮と試て史記とするめ及び
 一は才人と擬文章生補すい官に人あり
 又は法を承らりしらぬを横入及弟一と擬進士と
 とも擬文章生一と一勅云回會らりしらぬは秀一
 才の外と進士と一は細流云代に儒家とり出らん
 茂才秀才となりし也

辨引卷十

三十五

松芥抄云文章得業生の唐名と秀才と云後漢
 の光武皇帝の諱と秀才と云仍避之曰茂才
 茂才毛詩註云茂義也器用ナル才ヲホメテ云也
 秀才と進士との二科あり文學寮にて第一の
 及第と秀才と云秀才と云方略と云方略の
 二字は無端の大事と釋寸限りともさす
 と云也進士と云擬文章生に成る人も
 進士と云時務策と云當時の政道の事と同
 くと文を書て答と云成の方略の宣旨と云て
 献策の文も亦ともあり

文章生の方略と云りて献策するもの文章生の
 當職の時も後諸國の掾も文章生のひらり
 あり一任で十年して五年同より前官もあら其と
 散位といは様も成る時散位の時も方略と
 云りて献策と云すも是京官に任ぶるは献策の
 ゆるる也其とも非成業の人といふ方はいは列也
 非成業とも明法道の外もも家の業とていふも
 とも家のつごと成業と云
 進士の人の方略の宣旨と云りて式部省より課試せり
 式部は周禮の天官也文宣といふより撰叙と云て

人の才能と撰で官職と授けらるは武官の兵部也

因礼の長官也文武の法湯のこは天地也文官ト云ハ
名目也

或は文章生文子得業生を轉じて課試の例あり

擬文章生の人文章生を成て又文章得業生を

ひらりあり是は稀なる也

或は文章生にふまりて官略の試に及ばざるも

あり今夕考にけり也朱程院の行幸の次は前の

試に約と作て及第し給ひて進士を成て懸て侍從

乃官を任じらる也

た大辨 乃名大辨は人の任せらるる名家の人

儒家の人けり執する官也

式律大輔 儒家の人第一乃侍讀を任すは

よ才名あり人とほむと信ありていほせむ

大内記 詔勅宣命と書ゆ人代は儒者のあら也

和漢の才学あり人とけりらる也

すげりて月まぶしく 世に媚論を爲すは

ひらりありとほむとほむとすらゆ人也

大学子まつりけり 大学寮下町と條坊門の心

生西け寮は学文のあり灯燭料とけり也

くまの君 元服の衣は夕衣を冠者也云々也

どのすゝとわづらひとわす 寮試の時の長幼と

ひて序とわづらひ人の禮性いふ入故は冠者の意も

学は其の末座より列し終る也

今日学生は長幼為序と序と次第也

ひつがえて大学のさゆり 昔は常寮安置

先聖先師九哲先聖と必義文王周公孔子也

先師と徳行と顔淵子貢冉伯牛仲弓也

言諸と宰我子貢政事と冉有季路文字と

子游子夏これ十哲と云ふ所は学窓の燈燭料と

天子より終りて学とすめられ也中は学文

襄一と海氏志再興一終る也

文人擬生 学文とくす人々國々よりまら

と文人よりまら及身一と擬文章生を補せ

らんと擬生といふ次第くと経て幼童の時天子

の面前にて試あり也

心くのごんの種阿らる世まじん 冷泉の天曆

帝は喻る日中より代とせられる平の山阿也

兵部卿まじりし一冷泉式部卿も

兵部卿の納言とて下院公卿も位と親王乃官あり

故は人の執する也武官のものとありすれば將軍

のやうに武藏をまはつたりとて武部卿の天官

也文官也第一の親王を任じ親王も宿願の極官

梅壺つばきの御みひめ御三 六條の息女みこめといふ坊やうよとくれ幸さいわいなり

つらゝし母君ははより引ひきて妹あねまへ幸さいわいありて中宮なかつみやと

まきり世よの中なかみみななかかけけるる次つぎもも衰しよぶるる衰しよぶるる

又盛さかるる相壺あひつぼの御代みよの次つぎもも朱雀院すずけのゐの衰しよぶへへ又

冷泉院れいぜんゐ御代みよ也なり四季よきの轉ま変へすするるもも一ひと

右みぎ政まつ大臣おほし 職しやく原はら曰いは師し範はん一人ひとり儀ぎ形かたちハ海うみ無な其その人ひと

則すなは闕くわ故こ云い則すなは闕くわ之の官くわん又また無な職しやく掌しやく之の官くわん也なり希まれ依よ別べつ勅しやく

内うち辨べん叙しよ位ゐ除のぞ目め等ら被おほ勅しやく之の徳とく壽じゆ謙けんとと撰せんてて任にんじじるる

官也内辨と節會の日乃と省也叙位と位階と

行つと節會也除目と官職と行つと節會也

大伴おほ守まもりり 天福 廿五代 天智七年始任太政大臣

内大臣轉太政大臣例忠義公兼通天延六十六 二

年二月任太政大臣元内 但た圖と白はく也

大内おほ内うち大臣おほし子こよりより始はりり御みひめ御三 内大臣執政例忠義公堀

河内か内うち白はく兼か通と天てん祿ろく 六十四 三年十月廿七日内覧

同十一月廿七日内大臣

ひつひすすきき人ひとななれれどど何なにののここもも打うちちくくすす一ひとにひと也なり

夕ゆふ旁はら十二じふに歳さい雲う井い腐ふ十字じゆじ方はう又また方はうのの位ゐ況けい也なり二人

まうと三宮の孫やし

わきのし風

秋アキの夕ユフまきまきとほろろの萩ハギの二月萩フタツハギの下落

いそいそ女のさくらもたやまれ づつ下の物像

比ヒ巴ハらんらん女メ流ルせんよとくもくもひら姿すがたまら物ものあり

乃乃よとくてもやほーぬらどやんともれやゆめ

明アキラ石イシと大オホ言コトのわめ流ルは河カハ也也松マツ風カゼ卷マクよ娘むすめ君きみと兼ととの

時トキ乃乃秋アキ咽ノド石イシよりらり同年トシナヒの冬フユ十二月ニイハツの娘むすめ君きみと兼ととの

よ養ヤウ子シとさうしてあへおせりと兼ととの母ははの心こころより日ひの

なつらよとくともあら人の物ものよあふことなすらわの

時トキよひらひとくひひゆもと海うみ成なりの意いよーは

とあつとくともくういよま子の流る業わざとくひらう出でるよ

ゆづりまびーもす里さとは堪たてぬらとくもくもくも

ら海うみ也也古ふる来き前まへはも是こゝ非こゝも口くちもまへすくもま

ををとくひらとくとも婦むすめ人ひと慈あはれとく益えきよらぬあふれたあ

ーにすま咽ノド石イシにたぐひるまら海うみ成なりまてのよ

いさるんー

月ツキのらら〜き〜す〜あ〜おす〜流るひてまんの

糸イトる〜流るあや〜く物もの表あらわらりつらあ

文フナ選タ四シ十六ジュウロク陸リク士シ衡カガ豪カウ士シ賦シ序シ曰ク落ク葉ハ俟ヒ微ビ風フウ以テ

辨言卷十

四十一

隙而風之力蓋寡孟嘗遭雍門而泣琴之感以末
何者欲隙之葉无所假烈風將墜之泣不足繁哀
響也是故苟時啓於天理盡於民庸夫可以濟聖
賢之功斗筭可以定烈士之業言過時也故曰亦
不半古功已倍之蓋得之於時勢

李善注曰桓子新論曰雍門周以琴見孟嘗君
君曰先生鼓琴亦能令人悲乎對曰臣竊為足
下有所悲千秋萬歲後墳墓生荆棘游童牧豎
躑躅其足而歌其上曰孟嘗君之尊貴亦猶若
是乎於是孟嘗喟然太息涕淚兼睫而未下雍門

周引琴而鼓之徐勣宮徵彈角羽初終而成曲
孟嘗君遂歎敬而悅之是琴之感以末也

呂向注曰斗筭小器也李善曰時既啓之於
天理又盡於人言立功易也說苑曰管仲庸

夫也桓公得之以為仲父仲父之如クニシタ
ト也論語七子路篇曰斗筭之人何足算ノ注ニ

斗量名容十升筭竹器容斗二升斗筭之人言
鄙細也算一筭ト同シ

庸まとい賤者も賢能の名あり斗筭のすくき
才あり者も用らるるあり才学の古人の才も

及びぬも功名の何れも時の運也 漢氏の擲子天下歸
一めきこ内久後の娘弘徽殿の立后の時いさざら
とさし流よらりけいと海流り

雍門周の琴と弾ど今内久後の和琴と引流るの琴
の和あり和とくり

秋風樂 盤涉調也律也

聖樂とく天下の治乱とさる器也 礼記樂記曰樂
者為同 礼者為異 同則相親 異則相敬 礼義立則
貴賤等矣 樂文同則上下和矣

さんの和より何まりぬらそあらきるは口ごめり

かりこきりしとらと 内久後御也 漢氏也

繪合卷子 桐壺帝の源氏よの和ひ一初て後て
いそく才学といふの世よりいそくすらめあれは
もや何んといふすみぬらん人の命と幸とさるひ
ぬらといふは此物よめん

あんの和もあふこつてさる

晋向秀字子期 清恬有遠識 晉康善 魏秀為之作
後康被誅 秀作思舊賦 其辭曰 日薄虞淵 寒水淒
然 隣人有吹笛者 發聲嘹唳 甲乙 追思 疇昔 遊宴
好感音而歎 文選 象求

秋が花より

催馬樂

津

更衣

衣づくせんやと君達。ワグさぬい野原志の原萩乃花
すりやと君達や

注云、春夏ハ萩の葉のよりと謡杖を花よりと謡
さきんざらハ汝君達也あんがと云詞也
夕芳乃官位子のりり淡黄乃きとハ汝乃挨拶也
子とさゆとりよハ免ぐとあり

史記曰、明君知臣、明父知子

尤傳曰、擇子莫如父、擇臣莫如君

大學曰、人莫知其子之惡

いけりれりぞ打とゆえ

内大臣の後悔也

七歳より男女同居せぬ能法よき心愛よかれ

あまかりこそ一故也

いれよよとのいありに

公家のハ阿呼と唱、武家の

いれの御成と唱ふる也、遊驛のり也

集覽ニ注、師古曰、天子出則稱警、示戒、束也、入則

言驛所以止、行以清道也、劉貞父曰、言出入者互

支身出亦有驛也

さうさきりよ

夕芳ハ内府の甥也、撰家法花の

一族ハ花族とよ

ゆーけありのりともせてし

父母よ若て媒あり

て六礼とけてむくぬか妻とせど礼も密通も

い奇女とて所賢の代の戒とするは

かやうのしと語りまは帝のつづき娘をもつるは

ま川 世継物徳云云二代村と帝所定に康子肉

親王とて延喜乃皇女村と乃の妹よと弘徽殿あり

一内とと九条石壁相思ひて通はひ一が後と

顯て出へしはひ一也閑院を政大臣公季母也

是の媒ありてい帯けり也夕方のい湖言ます

はいて也

文のゆらりつてき也

内府の大家とて

ゆらり男女一おまわり一とて男女の礼を簡也

礼記内則篇曰生七年男女不同席不共食十有

三年学楽誦詩二十而冠始学礼三十而有室也

始理男事乃至女子十年不出内恒有学女事十有

五年而笄二十而嫁有故之喪二十三年而嫁

風のよしの竹まららるる

詠夏夜

風生竹夜窓閑卧 月照松時臺上行 白岳易

樂天い水窓の友とて竹を植てせし一と

空井存とらぐとや 是より名とと

可
骨方は元升の宿をまじりや晴む物のみなりん
萩のくも月あふとてくら

可
可
方きうまの骨にもまじりて物とまじりてのいひなる

さくどり
礼記 籩以穀骨為
籩之 以解結
花鳥云々どりどりあり

解るへしは維也物のいひりれとて物なり

礼記 肉則篇に童子の父母よつとまじりて骨は具を

ろ一也 細さるへくはとては骨とては

實枝云々こんハ夕骨のゆなごうかまへむきいふ交

のぬこの移びんたんとては

ゆかつしめやぎうまをせ給ぬいふあつら

師の

源氏君はまはれてやぐ母よとれ父帝のかりけり

孫よまじりてあめくつりきま母といふらあよま

て牙にんとせし父帝のあやまらや夕骨にいせれ

て母よとれ祖母大宮のかりそ孫女子孫女と

一孫よ訓むらめ牙にんとせし祖母のあやまら

やよとまだつら孫よまじりて方角もまじ

めゆよとてあまきひまじりてめし

五節なり孫よ
河海又公事振えりり十一月

中の世刀印の日まで也

河
本朝月令曰五節舞者清御原天皇
四十一代天
武天皇也

所制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女鬢髻應曲而舞獨入天驕他人不見拳袖五變故謂之五節

天武天皇吉野宮御て琴と弾し給ひし時曲の山北岫より雲霧より天女あまのつり琴曲より應じて天羽衣とみ度観して舞々る時帝は此よりし女子とし女さびすも唐むと袂よまれてし女さびす是とつりてみ人の舞妓と初也昔は今日のみさるよ給ひん為し所野の誰とめき終りしは使のありと

狩の使とせし也大嘗會も五人毎年の新嘗會も五人のつり善相云の意見あり近代は嘗會の次よりなり
今は大嘗會も新嘗會も新嘗會

人乃み節 人乃み節 人乃み節 人乃み節 人乃み節
云殿上人のまつりも大肉りのん也是の意見分
と子國司より人の女也又云卿よりよいては
め持より人さけりせらる也
云卿分二人受命分二人也受命分より出さる故
子人のみ節と云

可三善清行善相云意見曰立節舞技者大嘗會時

五人即皆預叙位其後年々漸增為時四人无預叙位之例由是至于大嘗會之時權貴家競進其女以死此妓

辨

禮記樂記曰觀其舞知其德聞其

謚知其行之迹也然則先王之為樂也以法也

善則行象德矣

明

傳 ひとめと命降する人地皆是者也

以前よりしてはらんせんらありし以前とせ

て 帝の以前より試ありき打洲は源氏の以前

と先ころころせし也 云事根源曰十一月申丑日と

立節帳臺試との常寧殿より主上御覽あり

内々泰と喉座より皆よりり調て帳臺より出御あり

殿上人も紙燭よりづぬまに御直衣より指貫より

御指貫とらるまとの御指貫とらるるけ時の外

より但御鞠の御帳臺の試より准してんころり也

帳臺より御座より御殿の底より紙舞あり

南殿の心仁壽殿より六葉香殿より心常寧殿也

帝ノ直衣指貫ハ殿上人ニ立てギレ玉ベキ故ナレニ

河めいすすよわの娘のや人をワからざるまあしとらるる

神樂 幣 本

辨引卷十

早八

遊樂ユウラク 小書コショ八公事ハコウジ根源也

しよめののすしシヨメノノスシ 何ナニ 万葉マンヤク未通ミトウ女メと申トモころい未ミ嫁カセ
女メのり也ナリニシテ天アマ乙ヲ女メハ天アマ人ヒト也ナリ妻ツメ女メと申トモころい女メの也ナリ
名ナ也ナリ

天アマは神カミ少シらき世ヨの友トモ 引ヒキテ神カミ少シらとつぎツギならナる用ヨウ

し女子コノメが神カミ少シら山ヤマのノつぎツギのノ久クき世ヨよりヨリといトイひヒきめてキき

あアとトずりズリのノ紙シ 花ハナ 舞マヒ妓キ装ツキ束ツク正マサ日ヒ赤アカ色イロ唐カラ衣キヌ寅トラノ日ヒ

靑アヲ色イロ唐カラ衣キヌ辰ツチ日ヒ靑アヲ摺スリ唐カラ衣キヌ赤アカ紐ヒモ日ヒ蔭カゲ鬘カマクラヒウ等トウ也ナリ靑アヲ摺スリ

い小コ忌トミのノり也ナリ源ヒラ氏ウヂ衣キヌのノ又マタやりヤリ給タマふも辰ツチ日ヒのノり也ナリ

れレいイまマ摺スリのノ紙シよりヨリ五イ節セツ衣キヌのノ事コトと申トモころい也ナリ

赤アカ紐ヒモ上ウヘハ沙サヲタミミアアフフ比ヒ法ホウヲシシ泥ドロニテニテ繪エヲ書キタリタリ右ミダリ

腋アキニ二ニ筋スジトトズル也ナリ 日ヒ蔭カゲ糸イトトハ白シロ糸イトヲヲ総ソウ角カクニシテニシテ左ヒダリ

右ミダリ八ハチ筋スジ或ナラバハ十二ジュウニ筋スジヲ冠カウノ左ヒダリ右ミダリノ角カクニトニトヒテヒテ垂タラシル也ナリ

小コ忌トミトハ布フヲ張テ山ヤマ藍アイト云イハ草クサニテニテ控カウキヲ摺スリモノナリ

大オホカタ狩カウ衣キヌノ如ニシ 臨リン時ジノ祭マツリノ舞マヒ人ヒトノ公キミ靑アヲ摺スリト

名ナ付ツキ太オホ常トコ會エノ時トキハ小コ忌トミト云イハ

その人ソノヒトをヲねネとトもモりリてテさサめメほホりリとトれレどドもモさサめメをヲせ

しシ 寛カン平ヘイ遺イ誠セイ曰イハク今イマ須ス公クウ卿ケイ之ノ中ナカ令ムコト貢コウ二ニ人ヒト雖シテ

非ヘ其コノ子コ必カナラシ令ムコト求モト貢コウくクいイ故コトよヨとトがガいイはハれレササみミ節セツよ

ぬヌりリしシ也ナリ

らぬー 父もい惟光也 河 世継物流さなれがれ
 ぬ乃亮人 かとう 今もいすもぐりー さ ぬー 柳うつく是
 さんら 日 世継よけ詞多し竹取物語よさんら
 やありら平の物語よさんらいあぞの人とりり
 汝等也 細

らぬやうらうのふらうかー ますへそ也
 几帳の魚ぶらうとらう常 ま わさびらちよらうい
 花 采花物語 拾 世に神くらきぬのわさうりらう種浦の瀆
 やよやわんつくとらう

あし馬

云事根源云て十代天武天皇十年正月七
 日よ帝小安殿 こあや よかへまで宴會の儀あり馬
 とんらふー 日 中紀三十九卷よかへり是也七日
 の節令乃らめなん

河 光仁天皇寶龜六年正月七日天皇御揚梅院小
 安殿設宴於五位以上既而内殿宴進青御馬兵
 部有進五位以上装馬 東 是白馬之始也

花 沖前試 花 勅部とらへ延長 六十代
 應和 辛 康保 日 等の例也 醜
 大敵の左郎君 夕秀十三歳也去年十三歳の附

史記と及第せり

はあがね舟よのりて

放鳩の策文乃中也

何 かつぐの物流云すまふあ試コトの歌詠よりしてひとり

舟よのせられて出たり則りりき文つてきり進

士よあれて方略ほうりやくの宣せん前まへくらりぬ

いふと吹つてふら節せふ行ゆよとつらふれきふかろぬ 管

上うへの唐たう堯ぎやうの礼樂れいらくと傳つたへり也なり冷泉院れいせんの代よ

かめえつり礼記曰樂由中出和在在 礼れい自り外が作ル敬敬

百ひゃくニガリ中ちゆう出しゅつ故こ静じやう礼れい自り外が作ル故こ文ぶん也なり也なり 礼樂れいらくは

よあらしつらふははらふとのかろりめええ来い一也

冷泉院

管 學まなぶれ者ものとあひてふづらふはつふ花はなの文ぶんや何なにせし

いふ冷泉院れいせんの天曆てんりやくの帝みかどははなれい日ひ中ちゆうにせせ代よと

すれれれ舞まひ舞まひの代よとて足あし並ならに物ものの教しゆもを

何なにとと何なにそぐぐらりけいんけいんのまどくは改かへ也なり

万まんの能のう賢けんよれくんでひひつりぬのふとらうらう後ご乃なり

何なによ何なにきつりな成なりゆゆべきと来き世せの中ちゆうににあは

すられらうとあよんま魔ま障じやうとらうして一切いっけつのるる何なにら

いひつり也

あまもや 催馬樂まゐり 名な 安名尊やすなう

あまもや今日のほろとまやいしとま

正 人もくやありきん今日のほうとさ

何れもくも今日のほうとさ

わあ嘯嘆也なつとんたのまき也まれの我也

そこの是下也人とのいふ詞也又義もそこのい

ふれ也曲也のころ詞也

きん人

催馬樂

人

揚人との舟らの湯津田と十町つれろとそ海

こんやそまやそまわつりこんやそまや

あもとそあともそあもあ方も妻とら夫とれい唱

も早くも早くも早くも早くも早くも

揚人の花人よとまひのころる足らぬの留よ人

そまの節也そまの唱日也め歌也そまの唱也

節とそまの

何れもくも

御遊

てい遊とつと樂也

何れもくもりのつらうあり

御儀は年富年壽也

又封戸位回もも後ろへ天子より院出来へも親玉右

細云奏議もも何れもゆるさめといは流と云毎年何の

官位とつらとつらと定めらりて封戸と戸の門戸也一

家とつらとつらと東宮へ一千の百戸ありて又親也

正十位の肉親也一の位回八十町ありて又

進士えいしよりあり給ひぬ 實教じつけう云進士の字に礼記の玉制

より出たり進まて爵禄しやくりくとくべき者なり也

きうごん 及弟あきあにとみ及あつ子こ也

侍従じじゆ八人 相繼あひつぎ後ご一五位いちごい下げ唐名たうな拾遺しやくい補お神かみ脚か

職原しやくげん曰八人之中三人少波しやうは兼あ任に之の其餘あま云達

任に之の

百寮訓要抄ひやくらうくんとん云遺いれとらと拾遺しやくいとらと補官おつかん也云達

の家乃人任えすらく野の御おん修しゆ寺じ傍はた家かなり也

初官しよかん子こお任にすらくいふ事也

經佛きやうぶつ法事ほふし乃日のひのさうとく 之代實録しよだいじつろく三十

元慶げんけい五十七 二年九月廿五日にねんくわがつにじふごにち太上天皇たいてんかう延のび屈くつ

碩せき字し高僧かうそう五十人於あ清和院せいわいん大設おほ齊會さいかい講かう法華經ほふくわきやう

限かぎ三日さんじつ訖しやま太皇太后たいてんこう今年始ことしはじ滿み五十之ご竿かん由よし是慶しよ

賀修善がしゆぜん祈禱いのち餘齡あま親王公卿しんおうきやうきやう文武家百官ぶぶくわん畢會ひかい

同どう

いあひまてりやいんさく

念ねん上じやう坂さか乃のらるゝ源氏げんじのさい人しんらるゝまけくま

り周文王しゆぶんわうの辰妃てんひ乃の徳とくのさくありとありとあり也

くだよ 古今集きんこんしふ十物じふぶつ名な昔むかし母はは

散ちりぬき後ごあくたなる花はなをさひさすの由よしなり

昔丹（昔丹）牡丹（牡丹）の一名とりよ又よくばるとりよ一徳（一徳）のまふ

り丹（丹）のちまひやひらひらむ牡丹（牡丹）縁（縁）の

りよ新足

馬場（馬場）殿

競馬（競馬）あづべき新足

彼岸（彼岸）の比

時正（時正）とて畫（畫）もみ十刻（十刻）花（花）のみ十刻（十刻）の四分

故吉日とす

もりのれりきとあんえわが推ざりたる

采花（采花）物流（物流）玄（玄）右（右）の店（店）いふつらつら物流（物流）いさされと今の世

いこのこいはいふつらつら物流（物流）いさされと今の世

てくのういふつらつら物流（物流）いさされと今の世



